クシャーン王朝の跡を訪ねて

井上靖

クシャーン王朝の跡を訪ねて

井上靖

潮出版社

クシャーン王朝の跡を訪ねて

©YASUSHI INOUE

定価　一八〇〇円

昭和五十七年一月十日　第一刷発行

著者井上靖　発行者富岡勇吉　印刷所

大日本印刷株式会社　発行所株式会社

潮出版社東京都千代田区飯田橋三―一

―三　製本所株式会社鈴木製本所　付

物印刷栗田印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取替えいたします

販売部・東京二三〇局〇七四一

振替東京五―六一〇九〇

詩

——人生とは・街燈・バルフの遺跡にて——

人生とは

――人生とは己が亡びに向って傾斜してゆく長い過程である。おそらくはいかなる文明もまた。インダス文明の都市国家・モヘンジョダロを掘ったマールシャルの言葉である。しかし、彼は本当は、――文明とは己が廃墟に向って傾斜してゆく長い過程で

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ある。おそらくはいかなる人生もまた。

と書きたかったに違いない。だが、そう書き得なかったところに、考古学者マールシャルの慟哭が聞える。発掘後半世紀を経過して、彼は老いたが、インダス文明の正体はまだ判ってはいないのだ。

街燈

今から四千年前の町・モヘンジョダロの路地を歩く。大廃墟の中を道だけが走っている。道の両側には焼煉瓦の壁の欠片が断続的に並んでいて、ところどころに街燈の置かれた凹処が遺っている。道巾は三メートル、路面は煉瓦で畳まれてなかなかしゃれているが、やたらに折れ曲り、折れ曲って、迷路をなしている。

とにかく四千年前に人間が歩いたように、ここを歩いて

みようと思う。煙草をくわえて路地を曲ってみるが、恰好がつかぬ。俯向いて足を運んでみてもだめ。ふしぎな銘酊の散策が続いた果てに、ふとここから十五キロのところをインダスが流れている、そう思った時だけ、道はそれまでとは全く別なものになった。街燈には灯がはいり、曾て生きた人々が歩いた薄暮の道になった。

バルフの遺跡にて

今はぼろぼろになった土の廃墟にすぎないが、これほど過去に於て宝石の輝きを持った遺跡を知らない。古代バクトリヤの王城の地、アレキサンダーの植民都市、続いてクシャーン王朝の花の都、そして降るや成吉思汗の命によって、一日にして地上から姿を消した都邑だ。

この宝石の遺跡に立ったのは、こんどが三度目だ。五年前の時は遺跡を南から北に突切った。三年前の時は城壁

の欠片の上に攀じ登った。三度目のこんどは廃墟の入口に立って、煙草をのんだだけで、遺跡の裾にひろがっているバザールの中に入って行く。

――めったに遺跡などには入らん方がいい。生命を喰われるぞ。

羊の肉を串にさして焼いている親父さんは言った。私はその串を受取りながら、そうかも知れないなと思った。いつか私は老いていた。今やバザールにひしめいているターバンの男たちの誰よりも老いているかも知れなかった。宝石の遺跡が持つ長い栄光と、その瞬時の死の、そのいずれかの輝きのために生命を喰われたのだ。

クシャーン王朝の跡を訪ねて／目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I　モヘンジョダロ紀行――7

II　クシャーン王朝の跡を訪ねて

スカンダル・テペを訪ねて――47
ベグラムの丘――71
バーミヤン幻想――85
カニシカ王の神殿――119
古代の幻影城――133
古代バクトリアの跡に立つ――145
サラン峠を越えて――155
大宗教都市・ナガラハーラ――169
歴史的往還・カイバル峠――187

冬の都・ペシャワール　205
ガンダーラからスワットへ　219
タフティバハイの山岳寺院　238
タキシラの三つの都市　257

Ⅲ　フンザ、ナガールの旅

往古の仏教都市・ギルギット　273
大斜面の町・フンザ　287
ナガールの少年　301
弓と矢の国・フンザ　319
インダス渓谷を下る　333

装丁／田中一光

I　モヘンジョダロ紀行

昭和五十三年の十月、約三週間に亘って、アフガニスタン、パキスタンに散在しているクシャーン王朝関係の遺跡、遺跡を経廻った。たいへん楽しい旅であった。さいわい京都大学の樋口隆康教授という好伴侶を得て、旅は頗(すこぶ)る内容の充実したものになった。

そのクシャーンの旅の報告を、何回かに亘って綴らせて頂こうと思うのであるが、その旅の一番最後に、往古の都市遺跡・モヘンジョダロを訪ねている。この方はクシャーンより更に二千年、あるいはそれ以上古い全くの謎の遺跡であり、〝クシャーンの旅〟からは

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com